
1990年代後半に媒酌人が消えた意味 —結婚式が変わる転換点として—

The Impact of the Disappearance of Baishaku-nin (Matchmakers) in the Late 1990s: The Turning Point Where Wedding Ceremonies Changed

小関 孝子
OZEKI Takako

1. 序：90年代後半の媒酌人消滅に着目した理由

(1) 結婚式の現況

2019年現在、入籍をとまなう法律婚のみならず事実婚を選ぶパートナーたちの存在も社会に受け入れられつつあり、婚姻形態の多様化とともに結婚式のスタイルも多様化している。そのいっぽうで、少子化の影響により婚姻届出数は毎年減少しており、2018年の婚姻届出数はついに60万組を割り込み59万組となった。過去最も婚姻届出数が多かった1972年の1,099,984組と比較すると、約54%にまで減少している。

厳しいビジネス環境のなか、結婚式のトレンドは分散といえるほどに細分化され、大きなトレンドを捉えようとする態度すら時代に合わなくなってきた。ホテルや専門式場での結婚式がいまでも支持されている一方で、ハワイや沖縄でのリゾート結婚式も珍しくなくなり、個性的な結婚式を挙げるカップルたちは、キャンプ場や田んぼ、鍾乳洞などあらゆる場所を結婚式場を選んでいく。このような多種多様な結婚式がSNSを中心に拡散されると、そのスタイルは即座に他のカップルに参照され、ますます結婚式のスタイルが千差万別となっているのである。いまや結婚式は「なんでもあり」なのである。いったいいつから結婚式は「なんでもあり」になったのだろうか。

(2) 転換点となる90年代後半：新興企業が勃興し投資回収の手段と化す結婚式

結婚式が「なんでもあり」に変わる発端は、1990年代後半の結婚情報誌『ゼクシィ』の登場なのではないだろうか。(株)リクルートが発行する『ゼクシィ』はやがて式場斡旋ビジネスを寡占化し、新郎新婦と会場をつなぐ唯一の情報インフラとなって結婚式ビジネスの構造を変えていった。『ゼクシィ』に目立つ広告を掲載しながら事業を拡大した邸宅風結婚式場(ゲストハウス)が投資家の注目をあつめ2000年以降次々に上場を果たすと、結婚式ビジネスに投資家というステークホルダーが登場し、結婚式は投資回収の手段という要素が色濃くなっていった(小関2012)。1990年代後半以降の結婚式の動向には産業界の戦略が大きく関与しており、かつてのように結婚を控えた若者層の意識変化だけでは読み解けなくなってしまったのである。結婚式場業は新ビジネスとして注目され全国に新興企業が登場する一方で、結婚式を挙げるカップルの数が減り、結婚式ビジネスの競争は激化の一

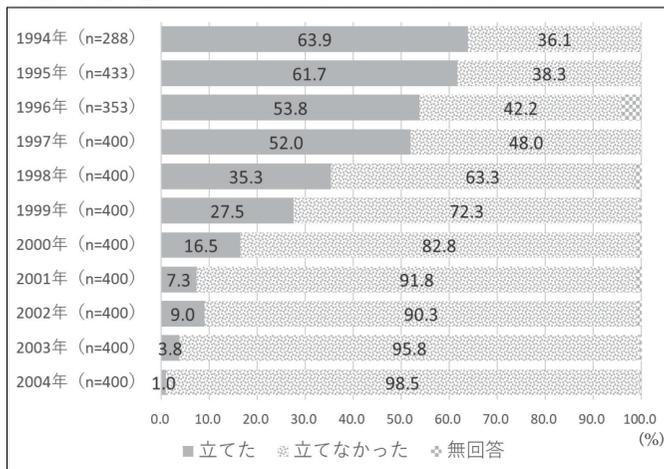
途をたどっていった。その中には強引な営業をする企業も現れ、独立行政法人国民生活センターは2015年11月に結婚式トラブルに関する注意喚起を行っている。その報告書によると、トラブルの9割近くが契約・解約に関するものである。⁽¹⁾したがって1990年代後半は日本の景気が低迷し結婚式が地味になっていくという地味婚化の流れがあった一方で、ホテルや専門式場での従来型の結婚式に飽きた層をターゲットに新しいスタイルの結婚式という商材が派手に販売され始めた時期でもあったのである。

1990年代後半以降の結婚式をテーマにした書籍は一般書・ビジネス書が中心であり、研究論文は数が少ない。いくつかある研究論文は結婚式のトレンドが今後どのような方向にいくのかという視点で分析されている。⁽²⁾しかし冒頭で述べたように、結婚式が「なんでもあり」になってしまった今では、次々に登場する結婚式トレンドを捉えようとする態度では結婚式の変質を捉えることはできない。そこで本稿では、改めて1990年代後半の結婚式の転換期に注目し、そのときに「何が生まれたのか」ではなく、そのときに「何がなくなったのか」という視点で結婚式の変質を考察してみることとする。

(2) 90年代後半の媒酌人消滅に着目した理由

1990年代後半に結婚式から「何がなくなったのか」を考えることで、筆者は媒酌人⁽³⁾の消滅に気がついた。1990年代の結婚式の内容が現在とどのように違っているのかを確認するために、1990年代当時の結婚式は誰が主催し、どんな方法で、誰に対して結婚を伝えているのかを改めて整理してみると、1990年代後半を境に結婚式から媒酌人が消えたという出来事が大きな意味を持つように思えてきたのである。媒酌人は両家と共に結婚式を主催する側に立ち、新郎新婦を見届ける立会人のような重要な役割を担っていたはずである。その媒酌人が消えた意味を明らかにすることができれば、結婚式がどのように変質したかがわかるのではないかと。強固に規範化された制度があつという間に崩れていった事例としても、媒酌人が消えた理由について考えてみる意義はあるだろう。このような着想のもと、本調査はスタートした。そこで本論に入る前に、1990年代後半に媒酌人がどのようなスピードで消えていったのかについて示しておきたい。【図1】は、1994年から2004年にかけて首都圏における媒酌人の有無がどのように推移したのかを、「ゼクシィ結婚トレンド調査2004」⁽⁴⁾をもとにグラフ化したものである。【図1】によると、1994年には63.9%が媒酌

【図1】首都圏における仲人（媒酌人）の有無の推移（1994～2004年）



人を「立てた」と回答していたが、1998年の調査では「立てなかった」が「立てた」を上回った。そして10年後の2004年には「立てた」という回答が1%になっている。媒酌人を立てる割合が全体の約1%という傾向は、2004年の調査以降、現在まで続いている⁽⁵⁾。

2. 媒酌人について

(1) 媒酌人に関する先行研究

日本の結婚式に関する研究は多くの蓄積があるものの、媒酌人に関する先行研究は限られている。結婚式に関する先行研究も媒酌人に関する先行研究も民俗学や歴史学によるアプローチが主流で、近代までを扱うものが中心であり⁽⁶⁾、その傾向は媒酌人に関する研究も同様である。媒酌人に関する研究は、阪井裕一郎による論文「明治期「媒酌結婚」の制度化過程」(2009)、「戦前期「媒介婚主義」の思想と論理」(2010)が新しいが、阪井による研究も明治期から昭和初期までを対象にしている。媒酌人に関する古い論考としては宮川満による「仲人考」(1961)や神島二郎による『日本の結婚観』(1969)の中の「I-11 仲人結婚の流行」がある。宮川の論考は仲人の起源に関するものであり、神島の論考は明治期の結婚に関する記述である。また、江馬務も『結婚の歴史』の中の「仲人の功罪」という項目で、江戸時代の婚礼について「この期の婚礼で、目立って多くなってきたのが仲人(なかうど)という媒介者の登場」(江馬 1971: 120)について触れており、確認することができた既往研究は全て近代までを対象にしたものであった。

阪井によると、仲介者のいる媒酌結婚は江戸時代には武士階級の慣習だったが、明治以降の近代化とともに一般に広がっていたものである。さらに阪井は、戦前期までの「媒酌婚主義」が当時の自由恋愛思想との矛盾するのではないかという疑問について、「すなわち、「内容」として結婚は「恋愛結婚」であることが奨励されたが、むしろそのことが必然的に「形式」としての「媒酌結婚」を規範化することに与したという皮肉な事実が浮かび上がる。恋愛は社会や国家のような公的意義への連結させる必要があったのであり、結婚する当事者にとって、この社会的承認を外部に示すには第三者である媒酌人を介在させる必要があった。」(阪井 2010: 106)と指摘している。つまり、恋愛という私的な出会いがきっかけであった場合こそ、媒酌人という第三者による承認が不可欠であり、その結婚を社会的に承認することにつながるのである。仲介者による縁談であっても恋愛結婚であっても、媒酌人は世間を代表してその結婚を社会化する存在だったのである。

戦後の結婚式においても、媒酌人は重要な役割を担っていたようだ。宮川は「仲人考」(1961)のなかで、「仲人の役割ないし性格」を「①婚期を迎えた男女二人の間を周旋して、両者を結婚へと橋渡しする。いわば連結器の役割をする。②両者の結婚を社会的に保証する。③結婚後の夫婦の間の諸問題を処理し、また生活上の面倒みてやるとともに、夫婦に対して恩人として親分的立場をとる。」の3つであるとした上で、③については「前近代的」と述べている。1960年代後半には恋愛結婚が見合い結婚の割合を超え、1980年代後半には8割強が恋愛結婚になるが⁽⁷⁾、それでも媒酌人制度は続いた。恋愛結婚の場合は、形ばかりの媒酌人という意味で「頼まれ仲人」と表現されることもあったが、「頼まれ仲人」の役割は挙式披露宴当日に限定され形骸化されつつも媒酌人制度は維持されていた。なお、1990年代以降に関する調査は、序で引用した「ゼクシィ結婚トレンド調査」の他に、2000年にライフデザイン研究所が行った調査結果が下関による2001年の報告にまとめられている。

(2) 1990年代の結婚式における媒酌人の役割

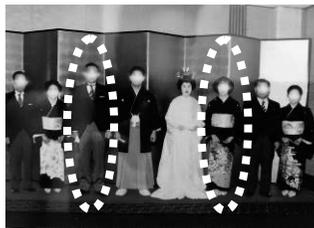
序で示したように、2004年以降ほとんどの結婚式が媒酌人と立てずにおこなわれているのであれば、ここで1990年代の結婚式における媒酌人の役割について簡単に解説しておく必要があるだろう。本来の媒酌人の役割は、(1)結婚準備段階での世話役、(2)挙式披露宴における立会人役、(3)結婚後の夫婦関係のアドバイザー役の3つに大別することができる。新米夫婦の指南役を担えるような社会的に地位の高い年長夫婦が媒酌人夫妻に相応しいとされて、媒酌人を頼まれることは名誉なこととされていた(竹内1979)。

媒酌人のいる結婚式と媒酌人のいない結婚式の決定的な違いは、新郎新婦に発言機会があるか否かであろう。現在の媒酌人のいない結婚式では、披露宴冒頭に新郎が挨拶をし、披露宴終盤で新婦が両親にあてた手紙を読み、結びに新郎が再び挨拶をするという流れがオーソドックスな進行となっており、新郎新婦が発言する機会が複数ある。余興で新郎新婦が歌ったり踊ったりすることも珍しくない。それに対して、媒酌人のいる結婚式では、新郎新婦は言葉を発する機会がない。なぜなら、披露宴冒頭の挨拶および新郎新婦の紹介が媒酌人の役目だからである。

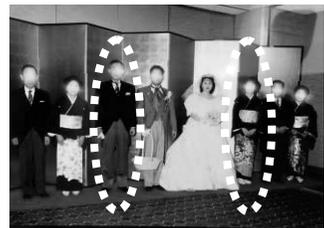
下記に示した5枚の写真は、インタビュー協力者FさんとHさんの実際の結婚式の写真である(インタビューについては後述する)。媒酌人の位置に注目すると、その役割の重要性が理解できる。まず写真①を見ると、最も重要な挙式において、媒酌人は新郎新婦の真横に座っている。披露宴のゲストの送迎では金屏風を背にして新郎新婦の両脇に媒酌人夫妻が立ち、両親より新郎新婦に近い位置でゲストの祝辞を受ける(写真②、③)。披露宴の開始時には媒酌人が新郎を先導、媒酌人夫人が新婦の手を引いて入場し、新郎新婦と一緒に高砂に座る。そして、披露宴冒頭で媒酌人が挨拶とともに新郎新婦の人物紹介をおこない、主賓挨拶、乾杯へと続く(写真④)。新婦がお色直しで中座をする際には、媒酌人夫人が新婦の手を引き会場を後にする(写真⑤)。



【写真①】 神殿にて



【写真②】 披露宴の出迎え



【写真③】 披露宴の見送り



【写真④】 披露宴冒頭の挨拶



【写真⑤】 中座時の先導

これら媒酌人の役割が現在の結婚式ではどのようになっているかという、披露宴の迎えは省略され、その代わりにウェルカムボードやウェルカムドリンクが用意される。高砂に座るのは新郎新婦のみで、冒頭の挨拶は新郎がおこない、人物紹介は司会者が行うケースが多い。中座の際に新婦の手を引くのは、新郎または姉妹など新婦の親しい人の役目となっている。媒酌人が結婚式から姿を消したことで、進行の自由度は増したが、それと同時に、選択肢が増えていることがうかがえる。

3. 媒酌人を立てないという選択肢の登場

(1) 1987年に媒酌人を立てなかった芸能人

バブル真ただ中の1987年6月に時代を先取りした1組のカップルが媒酌人のいない結婚式を行いその模様が全国に中継された。芸能人の郷ひろみと二谷友里恵の結婚式である。郷・二谷の結婚式の4か月前に発売された『週刊明星』では、ふたりの結婚式について「ひろみが留学していたアメリカでは、特に媒酌人は置かず、式に出席したすべての人が立ち合い、祝福するというかたちをとることが多い。(中略)実現するとすれば、いままで日本人が考えなかった、まったく新しいかたちの結婚式になる」⁽⁸⁾と予想している。この週刊誌の書きぶりからも、1987年当時は媒酌人を立てないということがいかに型破りであったかがうかがえる。

1980年代は芸能人の結婚式は高い視聴率が見込めるとして民放各局が放映権を争い社会現象となっていた。まだ結婚情報誌もインターネットも登場していない時代で、結婚式のトレンドは芸能人の結婚式のテレビや雑誌などの報道に大きな影響を受けていた。結婚式のトレンドがマスメディアの影響を受けやすかった理由は、日本の結婚式が招待制となっていることとも関連している。招待制の場合は自分が招待された結婚式しか実際には見ることができないため、多くの人が結婚式に関する情報に乏しく、結婚式に対するイメージはテレビや映画などによるところが大きくなる。芸能人の結婚式中継は高い視聴率から、どの結婚式がトレンドに少なからず影響を与えたことが、その中でも郷・二谷の結婚式の視聴率は47.6%と最も高い⁽⁹⁾。郷・二谷の結婚式は、媒酌人がいなくても結婚式は挙げられるという前例となって全国に中継された。郷・二谷の結婚式が後に媒酌人消滅の遠因となったかどうかは定かではないが、高い視聴率を鑑みると、媒酌人なしという選択肢を全国に発信したことは否定できない。

(2) 媒酌人と新郎新婦の関係

1980年代の結婚式は、芸能人の結婚式報道の過熱ぶりにも表れているように、日本の経済成長とともに華美になっていった。鎌田は1980年代の結婚式の変化について「結婚式は、土、日や祝祭日に集中するようになってきた。職場の上司や同僚が招かれることが多くなったためである。(中略)親戚にむけての結婚式から企業社会を中心とする意識が反映しているのであろう。」(鎌田1984:78)と述べている。かつて家と家の結びつきのための儀式であった結婚式が、新郎の職場での人間関係を強固にする場に変かわっていったのである。さらに鎌田は、「仲人や主賓席や来賓席に社長や専務や局長、そして代議士や大臣が着席す

るようになれば、新郎の前途も約束されたものとなるのであろう。」(鎌田 1984 : 79) とも述べている。媒酌人が新郎の出世にかかわるのであれば、両家が媒酌人選びに必死になるのも想像に難くない。1991年9月12日の毎日新聞の記事には、プロの司会者が「大学教授」「医師」「会社社長」にふんして(つまりニセモノが)媒酌人役を代行するサービスが好評を博しているという報告まである⁽¹⁰⁾。前述のとおり1980年代後半には恋愛結婚が8割を超えているが、それにもかかわらず媒酌人が重要だったのは、媒酌人という存在が夫婦を社会的承認するための存在ではなく、新郎の職場的承認の意味を持っていたからなのである。

(3) 媒酌人を立てない理由

ホテルなどで行われる仕事上の人間関係を中心にした大掛かりな結婚式への反動として1990年代初頭に登場したのがレストランでの結婚式であった。レストランウエディングの先駆けである(株)ひらまつの公式サイトによると、ひらまつが最初にウエディングを手掛けたのは1991年である。同サイトには「「初めてのデートも、プロポーズもした思い出のレストランでウエディングを」という1組のカップルの希望を実現したことが、その後続く2万組を超すウエディング事業の始まり。」⁽¹¹⁾と記されている。この結婚式に媒酌人がいたかどうかはわからないが、同サイトには新婦が自分でウエディングドレスの裾を持ち、新郎よりも先に車から降りるシーンが掲載されている。

1990年代に入り、媒酌人を立てない結婚式を選択する若者の存在がにわかにも注目を集めるようになると、結婚式業界は媒酌人を立てない理由を探り始めた。1994年10月16日の朝日新聞朝刊には、「「伝統」気にしない私たち流結婚式 仲人・結納・婚約指輪なし」という記事が掲載され、媒酌人も主賓挨拶もなしで、立食パーティー式のレストランウエディングをおこなった新郎の声や、新しいニーズに応えようとするホテルの「挙式のみ媒酌人なし」の新プランを紹介している。

1996年4月号の『月刊ホテル旅館』の「特集 変貌するブライダルマーケット」に掲載されていた(株)リクルートゼクシィ事業部の「'95年ブライダルマーケットトレンド調査(抜粋)」のなかに、興味深いデータを見つけた。調査時期は1995年8月、調査対象者はゼクシィ読者で1年以内に結婚予定の関東在住の女性未婚者253人(アンケートの有効回収数)である。その253人のうち、媒酌人を「依頼したい」と思っている人の割合は30.4%だが、実際に「依頼すると思う」と答えている人が52.6%なのである。その差となる22.2%の人は、「依頼したいと思っていないのに依頼する人」と読みかえることができ、媒酌人を立てている人々の中に迷いや本音が隠されているという当時の状況が浮かび上がってくる。

「ゼクシィ結婚トレンド調査2004 首都圏版」によると、1997年2月～3月の調査時点で「仲人を立てなかった」と回答した192組の「立てなかった理由(選択式複数回答)」の内訳は、「特に必要を感じなかった」が81.8%、「形式にこだわりなくなかった」が58.9%、「いろいろと面倒だから」が45.3%、「頼める方がいなかった」が4.2%、「予算の関係で」が3.1%となっている。この回答から読みとれることは、媒酌人と立てなかった人は、積極的に「立てない」という選択をしているのであり、「状況がゆるさなかった」という消極的な理由ではないということである。

4. インタビュー調査：媒酌人を立てた理由

(1) 調査目的と調査概要

1990年代に媒酌人を立てなかった人々の主な理由は、形式にこだわらない自由な結婚式を挙げたいというものだということが明らかになった。その一方で、同時期に媒酌人を立てた人の理由はどのようなものだったのだろうか。

下関によると、2000年にライフデザイン研究センターが実施したアンケート調査（n = 164）の結果によると、「仲人を立てた理由（複数回答）」の答えは多い順に「形式的に必要だったから 41.9%」「親の希望があったから 37.2%」「仲人を頼めるような人であったから 21.5%」「結婚後もお世話になると思われたから 20.9%」「2人が共通してお世話になったから 12.8%」「その他 5.8%」となっている。しかし、選択式のアンケート調査の結果だけでは1990年代に結婚をした人たちが、なぜ媒酌人を立てることのしたのかが不明瞭である。媒酌人がすっかり姿を消したいま、改めて媒酌人を立てた理由を探る必要があるだろう。

そこで筆者は、1990年代に初婚同士で結婚した7組を対象にインタビュー調査を実施した。調査期間は2019年8月から9月まで、7組の選択方法は機縁法による。調査方法は直接面談方式による半構造化インタビューとした。所用時間は1組あたり約30分から1時間であった。【表1】はインタビューの基本情報を挙式年月の古いものから順に並べ、一表化したものである。

【表1】1990年代前半から2000年代前半に初婚同士で結婚した7組

インタビュー	挙式年月	当時の年齢・職業	出会い	場所	挙式スタイル	披露宴	媒酌人
Aさん(妻)	1991年1月	新郎24・会社員 新婦23・会社員	恋愛(社外)	京都	キリスト教式 教会	ホテル	新郎の直属の 上司
B・Cさん(夫妻)	1992年6月	新郎28・会社員 新婦25・会社員	恋愛(社内)	東京	キリスト教式 教会	ホテル	新郎の直属の 上司
Dさん(夫)	1993年2月	新郎29・会社員 新婦24・アルバイト	恋愛(社内)	東京	神前式 ホテル内神殿	ホテル	新郎が勤める 会社の副社長
Eさん(妻)	1994年11月	新郎35・会社員 新婦33・会社員	見合い	東京	神前式 ホテル内神殿	ホテル	新郎の知人結 婚仲介者
Fさん(妻)	1996年2月	新郎25・会社員 新婦25・家事手伝い	恋愛(社外)	東京	キリスト教式 施設内チャペル	専門式場	新郎の直属の 上司
Gさん(妻)	1997年10月	新郎28・会社員 新婦26・会社員	恋愛(社外)	東京	神前式 ホテル内神殿	ホテル	新郎の直属の 上司
Hさん(妻)	1998年4月	新郎30・医師 新婦26・医師	恋愛(社外)	東京	神前式 ホテル内神殿	ホテル	新郎の医局の 部長

インタビューの目的は、媒酌人を立てた理由を探ることを軸とし、媒酌人と立てたと答えた人には、媒酌人の選考プロセスに関わる詳細を聞き取ることである。

(2) 調査結果：「なぜ媒酌人を立てたのか」

媒酌人を立てたと答えたAさんからHさんにその理由を尋ねたところ、1991年のAさん、1992年のB・Cさん、1993年のDさん、1994年のEさんが、「媒酌人を立てるのは当たり

前のことだったので、立てないという選択肢を思い浮かばなかった」と回答したのにたいして、1996年のFさん、1997年のGさん、1998年のHさんは「媒酌人を立てないという選択肢があることは知っていた」と回答した。Fさん、Gさん、Hさんが媒酌人と立てる選択をした経緯について、次のように話してくれた。

《Fさん(1996)》母が挙げた結婚式場と同じところで挙げるのが親孝行になると思い、有名な結婚式場で結婚式の準備をはじめた。夫は直属の上司に媒酌人の打診をし、了解を得ていた。ところが実際に見積もりをみると予算を大きく超えていたので、夫に「やっぱり媒酌人を立てずにレストランウエディングでこじんまりやろう」と伝えたとこ、「いまさら上司に言えない」と反対された。

《Gさん(1997)》どのような結婚式にするかは夫の両親がホテルと相談しながら全部決めた。その時の義母は「これが常識よ」とよく口にした。夫の両親は一度媒酌人を経験しており、そのことを誇らしく思っていたので、媒酌人は立てて当然という考え方だった。自分は言われるがまま従った。

《Hさん(1998)》医学部生の頃にはおしゃれなレストランウエディングに憧れ、ウエディングドレスの写真を切り取ったりしていたが、医師と結婚することが決まった時点で大規模な結婚式になることを覚悟した。当時医者の世界では、新郎が所属している医局部長に媒酌人を頼むことが慣習だった。2000年以降に結婚した自分の友人は医師であっても媒酌人を立てていないので、自分は最後の媒酌人世代だと思う。

(3) 調査結果：「なぜその人を選んだのか」

続いて、媒酌人と立てたと答えた方々になぜその人を媒酌人に選んだのかを尋ねたところ、【表2】にあるように、全員が新郎の関係者を媒酌人に選んでいた。お見合い結婚をしているEさんについては、縁談を紹介してくれた新郎の古くからの知り合いが媒酌人となっており、仕事関係者ではないとのことであるが、Eさん以外で媒酌人を立てた6組は新郎の職場の関係者を媒酌人に選んでいる。6組の媒酌人選びについての回答は、次の通りである。

《Aさん(1991)》夫が入社して間もない頃に地方勤務になり、たまたま結婚する時の上司がその人だった。

《B・Cさん(1992)》妻が社長秘書だったので社長に頼みたかったが、社長は従業員の媒酌人はやらないと決めていた。次に副社長に頼んだが、副社長が新郎の今後を考え「直属の上司である部長に頼んだほうがいいだろう」と辞退した。部長とはあまり合わなかったため、本当は頼みたくなかったが、仕方なく頼んだ。

《Dさん(1993)》媒酌人を頼んだ副社長は母方の遠戚でもある。自分が入社したきっかけをつくってくれたのがその副社長だったので媒酌人はその人しかいなかった。

《Fさん(1996)》夫の当時の上司に、夫が直接頼んだ。媒酌人には事前に食事をした時に初めてお会いした。

《Gさん(1997)》夫の当時の上司に、夫が直接頼んだ。自分と夫は合コンで出会ったので社内恋愛ではないが、たまたま同じ会社に勤めていた。大きな会社なので、夫の上司は知らない人だった。夫の上司が人物紹介の原稿を書くために、私の上司に内線をかけていたのをたまたま取り次いだが、気が付かないふりをした。

《H さん（1998）》 媒酌人を頼んだ夫の医局の部長は、夫が医学部生の時からの付き合いがある方なので、もともと夫とは親しい人だった。媒酌人を頼むならこの人しかいないという感じだった。とても忙しい方だったので、部長が出張中に滞在中のホテルまで出向き、媒酌人の依頼にうかがった。夫が事前に内諾をとっていたようで、実際には、依頼というよりも新婦の顔見せという感じだった。

以上、6組の回答から、媒酌人選びが新郎の仕事を深く関わっていることがわかった。DさんとHさんの場合は、媒酌人とは社会人になる前からの付き合いがあり、頼むならこの人と決めていた。Aさん、B・Cさん、Fさん、Gさんは、結婚する時点で夫の直属の上司だった人を選んでいった。

（4）調査結果まとめ

このインタビューでは 1990 年代に媒酌人を立てて結婚式を行った人たちに当時を振り返ってもらい、「なぜ媒酌人を立てたのか」そして「なぜその人を選んだのか」について回答を得た。その結果、見合い結婚をした E さん以外は、媒酌人は新郎の仕事関係者であった。また、1990 年代前半に結婚をした 4 組が媒酌人を立てないという選択肢を思い浮かばなかったと回答しているのに対して、1990 年代後半に結婚した 3 組は立てないという選択肢があることを知りながら、それぞれの事情で媒酌人を立てることを選択していた。結婚適齢期とされる年齢の人は、友人知人の結婚式に実際に参加することで、媒酌人を立てないという結婚式と出会っていったようである。

5. 結論：媒酌人の消滅は何を意味しているのか

1990 年代に結婚式の様々な変化がある中でも結婚式から媒酌人が消えたという出来事が大きな意味を持っているという仮説のもと、媒酌人に関する調査をおこなってきた。媒酌人は両家と共に結婚式を主催する側に立ち、いわばその結婚を社会的に承認する役目を果たしてきた。1980 年代以降多くの場合は、媒酌人は新郎の職場の上司に依頼された。媒酌人には、新郎の職場での円滑な人間関係と将来を見届けてもらう役目が変わっていった。1990 年代後半を境に、その媒酌人が不要になったということは、結婚に第三者による「社会的な承認」を求める必要がなくなったということ意味する。そして、結婚は「職場の人間関係や将来」とは切り離されて考えられるようになっていったのである。2019 年現在、結婚が私的な領域の事柄であることを誰も否定しないだろう。会社の採用試験においても、既婚か未婚かという質問は消えた。媒酌人の消滅は、結婚における「公的性 (Publicness)」消滅の転換点だったのだ。媒酌人という明治以降の近代化によって規範化されたひとつの制度が、1990 年代後半を境とした約 10 年間で、あっという間に消えていった。これは、ひとつの社会的規範が崩れていった事例としても、考えてみる意義があるだろう。

■注

(1) 独立行政法人国民生活センター 報道発表資料 (2015 年 11 月 5 日公表) 「トラブルになってからでは遅い！ 結婚式トラブルへの備えとは—「キャンセル料」「打合せ不足」に関するトラブルが

- 後を絶ちません」http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20151105_1.pdf (2019年12月10日閲覧)
- (2) 田澤・境 2004 は、結婚式の歴史を踏まえたうえで、2000年以降ゲストハウスを中心に新しい結婚式ビジネスが展開していることに注目し、21世紀に生き残るためのブライダル戦略について言及している。小関 2012 は2000年以降の結婚式ビジネスが行き詰まり、結婚式スタイルの多様化がもはや企業のコントロールできない範囲まで拡散したことを指摘している。どちらも今後の結婚式トレンドがどのようになるかという問題関心に基づいて書かれたものである。
- (3) 筆者が本稿で使用している「媒酌人」という言葉は「仲人」という言葉に置き換えることも可能であるが、セレモニーとしての結婚式に着目しているという立場を明示するため、本文では「媒酌人」という用語に統一した。本来「媒酌人」と「仲人」は違う意味の言葉であるが、1990年代後半頃には「媒酌人」と同じ意味で「仲人」という言葉が頻繁に使用されていたため、本稿で引用している新聞雑誌その他の調査でも両方の言葉がそれぞれ用いられており、引用部分については両方の言葉が混在している。本稿の引用文その他で用いている「仲人」という言葉は、前後の文脈から「媒酌人」という言葉と同じ意味で使用されていると筆者が判断したものを使用した。
- (4) 『ゼクシィ結婚トレンド調査 2004 ブライダルマーケット編 首都圏』2004年9月の序章11ページによると、同調査の調査概要は次の通り。調査方法：郵送法、調査期間：2004年4月29日～6月28日調査対象：首都圏の2003年4月～2004年3月に結婚をした「ゼクシィ」読者750組をランダムにサンプリング、集計サンプル数：400組。
- (5) 『ゼクシィ結婚トレンド調査 2018 首都圏版』によると、ゼクシィのアンケートに回答した784組のうち、媒酌人を立てたと回答したのは0.9%であり、媒酌人を立てなかったとの回答が97.8%、無回答が1.3%であった。媒酌人と立てたという回答は、全国推計値でも1.2%である。
- (6) 結婚式に関する先行研究は、柳田國男に師事した女性民俗学者瀬川清子による『婚姻覚書』（講談社、1957）をはじめ、江馬務『結婚の歴史』（雄山閣、1971）江守五夫『日本の婚姻』（弘文堂、1986）、関口裕子他『家族と結婚の歴史』（森話社、1998）、宮田登『冠婚葬祭』（岩波文庫、1999）、湯沢雍彦『明治の結婚 明治の離婚』（角川選書、2005）、石井研二『結婚式 幸せを創る儀式』（NHKブックス、2005）、雑誌『歴史読本』2010年10月号の「日本の結婚」特集など、民俗学または歴史学のもものが中心である。現在の結婚式をテーマにした学術書としては中矢英俊、近藤剛編著の『現代の結婚と婚礼を考える：学際的アプローチ』（ミネルヴァ書房、2017）が新しい。同書の中で、1990年代後半以降の結婚式について述べられている箇所は、中矢分担執筆による「第7章ブライダル市場の現状」「第8章ブライダル業界における課題解決と顧客満足度向上」であるが、中矢による分析は「何があたりしか」という視点でマーケットの動向を捉えるものであり、筆者の「なにがなくなったのか」という視点とは異なっている。結婚に関する社会的なアプローチは結婚式よりも婚姻形態に主眼をおいた研究が中心であるため、本稿のテーマと重なる部分は多くあるものの、ここでは別の研究として考えることとする。
- (7) 国立社会保障・人口問題研究所 WEB サイト「第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html06.html (2019年9月16日閲覧)
- (8) 『週刊明星』1987年2月26日号、pp160-161
- (9) 『朝日新聞』夕刊1988年5月6日11頁、および『読売新聞』東京夕刊2003年1月23日12頁をもとに一表化した1980年代に中継された芸能人の結婚式と視聴率は次の通り。

1980年11月	三浦友和・山口百恵	30.3%
1985年6月	神田正輝・松田聖子	34.9%
1985年9月	若島津・高田みづえ	30.2%
1986年10月	森進一・森昌子	45.3%

1987年6月	郷ひろみ・二谷友里恵	47.6%
1987年10月	渡辺徹・榊原郁恵	40.1%
1989年5月	五木ひろし・和由布子	27.3%

(10)『毎日新聞』東京朝刊、1991年9月12日19頁

(11) ㈱ひらまつ公式サイトより <https://www.hiramatsu.co.jp/history/> (2019年9月18日閲覧)

■参考文献

- 石井研二 2005 『結婚式 幸せを創る儀式』NHK ブックス
- 江馬務 1971 『結婚の歴史 ―日本における婚礼式の形態と発展―』日本民俗史学会編集 文化風俗選書1、雄山閣
- 江守五夫 1986 『日本の婚姻―その歴史と民俗― 日本基層文化の民俗学的研究II』弘文堂
- 小関孝子 2012 「結婚式の脱商品化という新潮流 ―商品化の歴史をふまえて」『Social Design Review Vol. 4』21世紀社会デザイン研究学会学会誌、p47-56
- 桂由美 『ブライダルブック 花嫁衣装のすべて』文化服装学院出版局、1968
- 鎌田慧 1984 「女の戦後史 87―結婚式―人並み意識が拍車をかける “虚飾の典”」『朝日ジャーナル』12月7日号、pp76-80
- 神島二郎 1969 『日本人の結婚観』筑摩書房
- 斎藤美奈子 2006 『冠婚葬祭のひみつ』岩波新書
- 阪井裕一郎 2009 「明治期「媒酌結婚」の制度化過程」『ソシオロジ』54(2)、pp89-105
- 阪井裕一郎 2010 「戦前期「媒介婚主義」の思想と論理」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』(70)、pp91-111
- 下開千春 2001 「現代女性の結婚式に対する意識と実態」『LDI Report』2001年5月号、第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部、p4-24
- 瀬川清子 1957 『婚姻覚書』講談社
- 関口裕子他 1998 『家族と結婚の歴史』森話社
- 田澤昌枝・境新一 2004 「挙式・披露宴におけるブライダルビジネスの現状と戦略」『東京家政学院大学紀要 第44号』pp91-110
- 竹内裕 1979 『現代日本人の結婚 第四巻 セレモニー考』大和書房
- 中矢英俊、近藤剛編著 2017 『現代の結婚と婚礼を考える：学際的アプローチ』ミネルヴァ書房
- 中山太郎 1983 『日本婚姻史(増訂版)』パトルス社(初版1928年、春陽堂)
- 宮川満 1961 「仲人考」『生活文化研究 10』生活文化同好会(大阪学芸大学紀要)、pp37-42
- 宮田登 1999 『冠婚葬祭』岩波文庫
- 湯沢雍彦 2005 『明治の結婚 明治の離婚―家庭内ジェンダーの原点』、角川選書。
- リクルートブライダルディビジョン企画室調査担当[編] 『ゼクシィ結婚トレンド調査2004 ブライダルマーケット編 首都圏』2004年9月(国立女性教育会館女性教育情報センター所蔵、非売品)
- 「結婚情報誌「ゼクシィ」がみる若者が選ぶ挙式と披露宴の最新トレンド」『月刊ホテル旅館』1996年4月号、pp141-146
- 「「伝統」気にしない私たち流結婚式 仲人・結納・婚約指輪なし」『朝日新聞』朝刊、1994年10月16日17頁
- 「特集 結婚式の食」『食文化誌ヴェスタ』No. 71、2008年夏、pp2-57
- 「日本の結婚」『歴史読本』、新人物往来社、2010年10月号